明治期の片山潜

辻野　功

一、片山潜の神話

「片山潜は、日本の労働運動がうんだ、もっとも偉大な、世界的な革命家です。かれは、日本の労働運動の最初の組織者で、指導者だったし、日本ではじめて社会主義の思想にめざめ、社会主義思想の宣伝をはじめ、また、社会主義運動を組織した人です。」[1]

野坂参三は、こう述べて、片山潜を賞揚している。

このような見解を、「片山潜の神話」と言う。その理由は、第一に片山潜が「日本の労働運動の最初の組織者で、指導者だった」とし、第二に「日本ではじめて社会主義の思想にめざめ、社会主義思想の宣伝をはじめ、また、社会主義運動を組織した人」だったとする点にある。人は、野坂の文章は政治的文章であって、それをことさら問題にするにはあたらないと言うかも知れない。しかし政治的文章であれば、歴史を偽造してもよいといういわれはないのである。[2] このような「片山潜の神話」は、なにも野坂参三に限るものではない。片山の『自伝』に附せられた平野義太郎の解説も、その最たるものの一つである。平野は、次のように述べている。

「片山潜は日本労働運動史上重要な役割を演じた『労働世界』の主筆をしながら『進歩的な労働組合の標本』として労働組合期成会（新橋鉄道製作所、砲兵工廠、赤羽海軍工作所の鉄工）をつくり（明治三十年）それを母胎として『鉄工組合』『日本鉄道矯正会』や活版印刷、洋服工、靴工の組合を全国に結成し、日鉄大同盟罷業を指導した。日本における近代的労働組合運動はこれより発展した。

桑田熊蔵、金井延らの社会政策学会の労資協調主義を批判し、『わがくに将来の労働問題は労働者みづから起って解釈せざるべからず』とて労働者の下からの自覚と日常闘争に重きをおき科学的社会主義の理論をプロレタリアの実践闘争のなかに活かした。」（傍点辻野、三七〇ページ）

野坂にしろ、平野にしろ、明治期の片山潜をこのように描くことは、明らかに歴史の偽造である。したがってそこに展開されている片山潜像は、歴史的真実のそれではなく、神話としての片山潜像である。

（1）野坂参三「片山潜の思い出」（『党をきずいた人びと』一九六二年、日本共産党中央委員会出版部刊所収）、三ページ。

（2）日本共産党中央委員会出版部発行の『日本共産党の四〇年』においても、「『日清戦争』後、日本ではじめて自主的な労働組合がつくられました。それを提唱し指導したのは、のちにわが党の創立者になった片山潜です。……当時（明治三〇年代……辻野）の社会主義者は、まだ空想的社会主義や無政府主義の影響をつよくうけていましたが、片山潜はこのころすでに、『マルクス主義こそ自分たちが採用し実践すべき真の理論であると確信するにいたった』と書いています」（九～一〇ページ）と述べられている。本書は、「厳密な意味での党史ではありません」と断わられているものの、共産党の「四十年にわたる活動の概要と歴史的役割を研究し、わが国の革命運動の実際から生きた教訓を学ぶのに役だつものと」（五ページ）期待されている以上、歴史的論証に耐えることが最低限の必要条件でなければならない。他の政治的文章においても、同様であろう。政治が特定の目的のために、歴史を偽造することは往々あることであるが、学問はそれを黙視すべきではない。たとえそれが右翼であろうと、左翼であろうと。まして科学的社会主義をその行動の指針とする政党に対しては、なおさらのことである。

二、歴史の真実

周知のように、日本における労働組合運動は、一八九七年（明治三〇年）の職工義友会およびその発展としての労働組合期

成会の結成に始まる。そしてこの労働組合期成会の指導下に、鉄工組合、日本鉄道矯正会などの労働組合が結成された。このような黎明期労働組合運動を指導したのが、出稼者として一〇年間アメリカ合衆国で生活するうちに労働問題に開眼し、A・F・L会長サミュエル・ゴンパースから直接指導を受け、正式にA・F・L日本担当オルガナイザーに任命されて帰国した高野房太郎[1]であった。一八九六年に帰国した高野は、しばらく横浜の日刊英字新聞『ジャパン・アドヴァタイザー』の記者をした後、翌年四月に、サンフランシスコ時代、ともに職工義友会のメンバーであった沢田半之助、城常太郎らと同名の職工義友会を組織した。職工義友会は四月六日、第一回演説会を開き、その席上高野が執筆したパンフレット『職工諸君に寄す』を配布して、職工に労働組合の結成を訴えた。六月二五日には、職工義友会は第二回演説会を開いたが、演説終了後高野は職工義友会を代表して、労働組合期成会結成を訴え来会者の賛同を求めたところ、四七名がこれに応じた。かくして七月四日、片山潜をはじめとして七一名の参加のもとに、労働組合期成会が設立されたのである。そして八月一日の第一回月次会で、高野は沢田、片山らと共に期成会の幹事に選ばれ、さらに幹事会の互選の結果、幹事長に選ばれた。

この労働組合期成会の指導のもとに、一八九七年一二月、日本最初の近代的労働組合である鉄工組合が、労働組合運動の機関誌『労働世界』の発刊と時を同じくして生まれた。しかしこの鉄工組合が、片山潜の指導下に生まれたとするのは誤りである。特定の人物を一名あげるとすれば、高野房太郎をあげるべきであって、二名あげる時、初めて片山の名が高野の名とならべてあげられるべきである。ちなみに、鉄工組合発会式においても、高野はその準備委員長をつとめて「開会の辞」を述べ、片山は「閉会の辞」を述べているのである。

一八九八年四月には、その年二月の待遇改善要求のストライキに勝利した日本鉄道の機関手、火夫らによって日鉄矯正会が結成された。この日鉄矯正会が労働組合期成会の指導下に生まれたとするのは、言いすぎであるし、まして片山の指導下に生まれたとはとうてい言えない。すなわち、日清戦争中より会社に対して種々の不満を懐いていた日本鉄道の機関方、

火夫らは待遇期成大同盟会を組織し、会社側に待遇改善、職名改称などを要求していたが、指導者が解雇されるに及んで、二月二六日より全線の機関車の大半を止めてしまった。そしてストライキは、労働者側の勝利に終わり、労働者は争議団体であった待遇期成大同盟会を解散して、永続的な組織である日鉄矯正会を結成したのである。したがって日鉄矯正会は、労働者の自発的活動の結果誕生したのであって、「労働組合期成会の支持の下に成立した」[2]とは言えても、「労働組合期成会の指導の下に」とか、「片山潜の指導下に」とは決して言えないのである。まして片山が「日鉄大同盟罷業を指導した」などという平野の叙述は、まったく事実に反する。さらに平野は、前にあげた引用文の中で、致命的な誤りをおかしている。「片山潜は……『労働世界』の主筆をしながら……労働組合期成会をつくり（明治三十年）それを母胎として『鉄工組合』『日本鉄道矯正会』……を全国に結成し……」と平野は述べているが、『労働世界』は労働組合期成会第三回月次会において発刊が決議され、先に述べたように、鉄工組合発会式の当日第一号が発行されたのであって、平野は時間的継起の順序を逆にしている。この事実は、労働組合運動史を研究する者にとって、初歩的な常識であって、碩学の名高い平野義太郎ともあろう者が、このような事実を知らないはずがないのである。

いずれにしても、日本の労働組合運動に創始者がいたとすれば、それは高野房太郎であった。そして片山潜は、その最大の協力者であったとは言える。しかしその逆ではない。「予はキングスレー館の主人株であったが別に之と言ふ定った職業もなければ、又金まうけも為て居無いし、何も演説が上手と言ふ訳でも無く或は労働問題の専門家でもなかったが、演説家の頭数には利用されて、何時でもきまって出席して演説した……其の頃の予はあらゆる労働問題に関した演説会に出席したが相談会にも加ただけで別に之れが幹部の一人でも何でもなかった。……予が労働運動に身を入れて尽力し始めたのは『労働世界』を発行する様になってからである」[3]という片山自身の言葉が、このことを証明している。

片山潜は、一九〇〇年（明治三三年）の治安警察法制定を契機に、労働組合運動から社会主義運動へと、その活動の舞台を

移していった。片山が社会主義思想に触れたのは、かなり古いことである。周知のように、片山はアメリカ合衆国に渡り、労働しつつ学んでいたのであるが、グリンネル大学に入学した年（一八八九年）の暮、彼は発刊されたばかりのリチャード・イリー教授の『キリスト教の社会的側面』（Social Aspects of Christianity）を読んで、キリスト教社会主義に開眼し、さらに四年生のとき、応用経済の一科として社会主義を一期間研究し、参考書としてフェルディナント・ラッサールの伝記を読み、強い影響を受けた。その影響の強さは、「予が社会主義者になったのは……之を読んでからのことである」[4]という彼自身の言葉によっても推測される。さらに彼は、一八九四年に、友人と二人で、当時の社会問題の中心地・イギリスへ徒歩旅行を企てた。その折、彼はグラスゴー市を訪ね、水道、下水をはじめとする、都市改良事業に強い印象を受け、都市社会主義の正しさを確信するようになった。

片山潜は、一八九六年（明治二九年）一月、あしかけ一三年ぶりに日本に帰ってきた。在米中、社会主義に開眼した片山が、帰国後、社会主義を鼓吹したかというと、事はしかく簡単ではない。帰国直後『六合雑誌』に発表した「社会学の綱領」において、彼は「世間往々にして社会主義と社会学とを混視し又社会党と社会学者とを同視するものあり、為めに社会学及社会学者は大に世人の擯斥する所となれり、豈亦寃ならずや。夫れ社会学の真正の目的は……人類の集合を整然たる規律の下に置いて其福利を増進するの方法を講究するものなり。豈彼の社会の組織を破壊せむとする社会党の如きものを助長せしむるものならむや」と述べて社会学と社会主義を区別し、さらに社会主義者は「矯激悖戻の極端論を唱導し建設的論者を指して社会の敵となし破壊的の一方に趨りて狂奔す」[5]る者だとして、社会主義を烈しく攻撃した。片山は、そのしばらく後に「理想的社会主義を日常の政治的相像（ママ）として之を活用したるものは実にラサルの功なりと謂ふへし」[6]と社会主義に賛意を表し、さらに「知らず日本のラサルは何処に在るやを」と述べ、「ラサルの如き人士の出て」[7]くることを待望したのである。

このような例は枚挙にいとまがなく、社会主義に関する片山の種々の論及をみれば、混乱をきたしているのではないかと

思えるほどである。しかし一見矛盾的な表現の中にも、一つの共通点がある。すなわち片山は、社会主義を矯激なものと穏和なもの、破壊的なものと建設的なものに二分し、前者を強く否定しながらも、後者を高く評価しているのである。そして穏和な社会主義の内容として考えられたのが、都市社会主義であり、協同組合社会主義であった。

このようなとき、片山よりはるかに高い地点まで到達していた社会主義者がいた。その一人が安部磯雄[8]である。同志社に学んだ安部磯雄は、三年間のアメリカ留学を終え、さらにしばらくの間ベルリン大学で学んだ後、一八九五年に帰国した。翌年四月、彼は『六合雑誌』に「社会主義に対する難問」を発表し、社会主義は、生産については個人競争を廃し、生産に必要な「土地製造所及び其他の資本の如き、或は運搬に必要なる鉄道運河等の如きものは挙げて国有となし、以て社会的共働主義を行はんと欲するもの」で、これらの点については諸家の間に異論はないが、問題は分配をいかにするかにあるとして、「社会主義は到底共産主義にまで突進せざれば止まざるべし、若し中途に彷徨することあらば社会主義は決して思ふ程の効を奏すること能はざるべし、吾人は社会主義論者が今一層勇を鼓して論理上其達せざるべからざる所まで達せんことを望むなり」[9]と論じた。このような安部の思想は、片山が「矯激悖戻の極端論」として非難排斥したものにほかならなかった。安部は「社会の権力を借りて人類の幸福を増進するの政策なれば如何なることも之を社会主義と称」するような者は、「未だ社会主義の何たるかを知らざるの人」[10]だとしたが、安部の目から見れば、逆に片山は「未だ社会主義の何たるかを知らざるの人」の一人であった。

同志社で安部の級友であった村井知至もまた、片山よりはるかに抜きんでた社会主義者であった。村井は安部と共に、請われて労働組合期成会の評議員に就任し、『労働世界』に社会主義に関する論文を寄稿した。さらに一八九九年七月には、日本で初めて体系的に社会主義論を展開した『社会主義』を公にしたのであるが、当時村井は社会主義の理論家として、安部と共に双璧をなしていた。

周知のように日本の社会主義運動の起源は、一八九八年一〇月に結成された社会主義研究会にまでさかのぼるが、この社会主義研究会の会長は村井であった。社会主義研究会は一九〇〇年一月になると、実践を目的とする社会主義協会へと発展した。今度は、その会長は安部であった。片山はこの二つの組織において、安部、村井の両名から大いに啓発されつつ、その社会主義思想を発展させたのである。明治の社会主義運動は、一九〇一年には政党結成を試みるまでに発展し、社会民主党の結成が企てられた。片山はこの社会民主党結成の有力なメンバーであったが、指導者はやはり安部であって、綱領である有名な『社会民主党宣言書』も、安部の筆になるものであった。安部は社会主義理論において卓越していたばかりではなく、その人格においてもまた衆を抜きんでていた。当時社会主義者の中において、彼の「人望は非常なるものにして、将来若し社会党が有力なる政党たるの日あらんには其首領たる者は必ず安部氏なるべしとは」[11]、多くの人の異口同音に語るところであった。

以上述べてきたように片山潜は、安部磯雄さらには村井知至のはるか後塵を拝していた。したがって、「片山潜は…日本ではじめて社会主義の思想にめざめ、社会主義思想の宣伝をはじめ、また、社会主義運動を組織した人です」という野坂の叙述がいかに事実に反するかは、すでに明らかである。まして片山がこの頃すでに「科学的社会主義」、すなわちマルクス主義の立場に到達していたとする平野の見解は、論外である。

それでは片山潜の神話が否定されることによって、片山は低い歴史的評価しか与えられないのであろうか。事実、松田道雄は「片山潜は、マルクス主義史家によるあらゆる神話化にもかかわらず、明治の社会主義者としては失格者であった」[12]と、片山に「失格者」の烙印を押しているが、はたしてどうであろうか。

（1）高野房太郎は、労働組合運動史上、片山潜と比較して、不当に低く評価されてきた。しかしながら、それにはそれ相当の理由があった。第一に、高野が日本の労働組合運動に関係したのは、一八九七年から一九〇〇年初めまでのわずか三カ年にしか過ぎなかったばかりか、彼の三六年の生涯全体

が、詳しくは知られていなかったからである。第二に、高野が終始労働組合主義に徹していたのに反し、高野の協力者であった片山潜は、後にはその思想を共産主義にまで発展させ、コミンテルン執行委員にもなり、国際的に有名になったが、後の共産主義者としての片山への高い評価から逆に、労働組合期成会時代における片山の過大評価＝高野の過少評価が生みだされたのである。

高野房太郎の思想と活動については、拙稿「高野房太郎の思想と生涯」（『同志社法学』第九一号、一九六五年）、「明治社会主義の成立」（『講座・日本社会思想史』第一巻、一九六七年、芳賀書店刊所収）参照。

(2) 大河内一男『黎明期の日本労働運動』一九五二年（岩波書店刊）、七一ページ。
(3) 片山潜『自伝』一九五四年（岩波書店刊）、二一七～一九ページ。
(4) 同右一七六ページ。
(5) 片山「社会学の綱領」『六合雑誌』第一八八号、一八九六年八月、二五～二七ページ。
(6) 片山「独逸社会共和党の創立者フェルヂナンド、ラサル（其一）」『六合雑誌』第一九二号、一八九六年一二月、三一ページ。
(7) 片山「フェルヂナンド、ラサルの社会主義」『六合雑誌』第一九八号、一八九七年六月、三三ページ。
(8) 安部磯雄の社会主義思想については、拙稿「明治社会主義の成立」（『講座・日本社会思想史』第一巻所収）、岡本清一「安部磯雄・山川均」（『同志社の思想家たち』一九六五年、同志社大学生協出版部刊所収）参照。
(9) 安部磯雄「社会主義に対する難問」『六合雑誌』第一八四号、一八九六年四月、一四ページ。
(10) 安部「社会主義に就いて」『六合雑誌』一九五号、一八九七年三月、一ページ。
(11) 山路愛山「現時の社会問題及び社会主義者」（岸本英太郎編・解説『明治社会主義史論』一九五五年、青木書店刊所収）、一一二ページ。
(12) 松田道雄「日本の知識人」（『日本知識人の思想』一九六五年、筑摩書房刊所収）五一ページ。

三、片山潜の思想と行動

――労働組合運動の指導者として――

すでに述べたように、日本における労働組合運動は、高野房太郎たちが職工義友会を結成したときに始まるが、その頃片山潜はキングスレー（琴具須玲）館を開いてセツルメント事業に従事していた。すなわち、一一年間アメリカ合衆国で働きつつ学ぶうちに社会的キリスト教の影響を強く受け、さらにラッサールに傾倒するようになって、社会問題に開眼した[1]片山は、一八九七年三月、アメリカ海外伝道協会のD・C・グリーン博士やM・F・デントンの援助を得て、神田三崎町一丁

目にキングスレー館を開いたのであった。それは、彼が実地に見てきたボストンのアンドーヴァ・ハウスやロンドンのトインビー・ホールに倣ったものであり、その名前はおそらくイギリスのキリスト教社会主義者キングスレーにちなんだものであった。

キングスレー館で社会改良事業に取り組んでいた片山潜は、労働組合運動を始めた高野房太郎らの注目するところとなり、片山は六月二五日の職工義友会第二回演説会に請われて弁士として参加し、それ以後労働組合運動に加わるようになった。労働組合期成会が結成されると片山は幹事に選ばれ、鉄工組合においては高野と共に本部参事会員として、さらに『労働世界』においては、編集部長として労働組合運動を指導するようになった。

当時の片山の思想は、彼自身「予は始めは鮮明な立場を持たなかった」[2]と回想しているが、基本的には高野と同様、穏健な労働組合主義であった。片山はまず、「今日に在りて労働問題の必要を疑ふ者は猶ほ穴ある舟中に安坐して其の沈没の危険を顧慮せざる者」[3]であるとして、労働問題の重要性を説き、その労働問題の解決のためには、労働者の団結＝労働組合の結成が「目下の一大急務なり」[4]と訴えた。しかしながら、このような労働者の団結の強調は、同盟罷工（ストライキ）の奨励に通ずるのではなく、かえってその回避と消滅に通ずるものであった。この間の論理を、彼は「吾人は近時屢々同盟罷工の声を聞く、又労働問題は既に人心を煩すに至れり、吾人は今聞くが如き同盟罷工は甚だ労働者の為めに望まざる所なり、……元来同盟罷工は労働者自ら非常の害を蒙り、資本家は不便を感じ、社会をして往々困難の位置に陥らしむるものなり。……労働団結は労働者に勢力を与ふ、……其の結果は同盟罷工を為すの要なきに至るべし」[5]と説明している。

このような立場に立つ片山が資本家の啓蒙に力を注いだのも当然であった。彼は「隆盛なる労働組合は繁栄なる工業と並に手を携へて進行」するという労資協調論の立場から「組合を組織すれば同盟罷工は増加すべきやと謂ふに決して然らず、余は断じて言はんとす、組合の組織成る時は同盟罷工の必要は消滅せん」[6]と述べて、資本家を啓蒙したのである。しかしなが

ら片山の労資協調論は、ずるずるべったりの労資協調論ではなく、あくまでも労働者の立場からする「真正の調和」[7]であった。彼は、労働者が資本家にむやみに頭を下げ腰をかがめて屈従するのは「真正の調和」ではない、と強調したのである。

片山は、以上述べたような思想を、労働者に一貫して訴えたのであるが、彼は、自分の考えを東京およびその周辺の演説会で、主張しただけではなかった。彼は、一八九八年七月、高野らと共に、東北地方へ遊説旅行を行ない、大宮、福島、一の関、盛岡、青森、尻内、仙台、宇都宮で日鉄矯正会員、鉄工組合員を主たる対象にして演説会を開いた。演説会は、最低五百名最高千名の聴衆を集め、「将来必ず何等かの結果を生むべき多くの種を播きしと共に、一の関、盛岡、尻内、青森、仙台等の矯正会員をして期成会に同情せしめ、青森に鉄工組合廿五支部を創立せしめ、盛岡に鉄工組合二十六支部を設立せしめ、又福島仙台及宇都宮等の鉄工組合員の気焔を高めて廿三支部の勢力を進ましめられたる等の少なからぬ直接結果をも得た」[8]のである。翌年七月には、今度は片山一人で東北・北海道地方へ遊説旅行を行ない、黒磯、福島、仙台、一の関、盛岡、尻内、青森、札幌、旭川、原町、平、水戸において「労働問題は労働者自身が解釈せざるべからざる者」[9]であることを訴えると共に、矯正会員との茶話会、懇親会においては、日鉄矯正会と労働組合期成会との合同の必要性を説いたのである。

直接労働者に訴えた演説にもまして大きな影響を与えたのは、『労働世界』の誌上を通じて彼が展開した啓蒙宣伝活動であった。すでに述べたように、一八九七年一〇月の労働組合期成会第三回月次会において、労働組合運動の機関誌発刊が決議され、その結果労働新聞社が設立され、鉄工組合発会式の当日たる一二月一日に、『労働世界』第一号が発行されたのである。『労働世界』はタブロイド版一〇ページだてで、最後の一ページは英文欄となっており、一部二銭で毎月二回、一日と一五日に発行された。『労働世界』はその創刊号社説において、「労働世界の目的は『労働は神聖なり』、『組合は勢力』なりとの金言を実行せんとするにあり」と宣言し、その後も一貫してこの基本的立場に立って、労働者の啓蒙に取り組

んだのであるが、『労働世界』は編集部長に就任した片山の完全なイニシャチブのもとに発行された。

片山は一貫して労働者の団結の強化を訴え続けたけれども、必ずしも労働組合結成の奨励にのみ終始したのではなく、彼は高野と共に共働店＝消費組合と労働倶楽部の結成を、労働者に熱心に説いたのである。[10] なかでも共働店結成の主張は、労働者に熱烈に受け容れられ、鉄工組合員や日鉄矯正会員はすすんで共働店を設立して、自分の生活をその消費面で防衛するために立ち上った。当時設立された共働店の数は、『労働世界』の記事に見える限りでも二〇ほどあり、共働店は労働者の団結を強めるのに、大きな役割を果したのである。

労働者に向かって団結の強化を説き続けた片山潜は、政府や資本家に対しては、一貫して労働者の保護を要求した。そのような片山にとって、一八九六年以来政府もその制定を考慮しはじめていた工場法は、是が非でも実現させたい法律であった。一八九八年一月に成立した伊藤内閣は、工場法案を議会に提出する意向を示した。このような情勢をみた『労働世界』は、第一七号（一八九八年八月一日）において「工場条例制定の機は断じて尚早に非ず」と主張して、その制定を強く要求した。そして労働組合期成会は、九月二三日に第一五回月次会を開いて、工場法案を検討して修正意見を決めると共に片山、高野その他三名を陳情委員に選んだ。片山たち陳情委員は前後三回にわたって、政府、商業会議所、その他有識者を訪ね、工場法案の修正とその早期制定を訴え、また期成会員全員の署名した請願書を農商務省に提出した。労働組合期成会は、政府その他に陳情を行なう一方、一〇月二三日には横浜において、一一月六日には神田錦輝館において「対工場法案政談演説会」を開いて、その制定を要求した。しかしながら片山や高野を先頭とする労働組合期成会の運動もむなしく、工場法案はついに日の目を見ず、片山は「噫労働者の強請するまで工場法制定せられざるべき乎」[11]と、慨嘆した。

黎明期の労働組合運動は、工場法制定要求運動にも見られるように、順風に帆を挙げたようには進まなかったとは言え、高野と片山の精力的な指導によって、まずまず順調に発展していった。鉄工組合は、設立時の一八九七年末に組合員一、一

八三名、九八年末には二、七一七名、九九年九月には約五、四〇〇名に達し、日鉄矯正会は、九九年初め約一、〇〇〇名の組合員と一万円の積立金を有し、暮には五万円のストライキ基金と二万円の共済基金を有するにいたった。一八九九年一一月に結成された活版工組合もまた、約二、〇〇〇名の組合員を有していた。そして労働組合期成会の会員は、一八九七年末の約一、二〇〇名から、九八年末約三、〇〇〇名、九九年末約五、七〇〇名へと発展していった。

ところが、労働組合主義を指導理念として発展してきた黎明期労働組合運動も、その過程で、新しい問題を生み出した。それは高野的労働組合主義のコースと、『労働世界』に拠る片山的社会主義のコースとの対立であった。『労働世界』の思想的立場がどのようなものであったかは、「労働世界の方針は社会の改良にして革命にあらず。其の資本家に対するや敢て分裂的争闘を事とせんとするにあらずして真正の調和を全ふせんとするにあり」と宣言した創刊号社説に明らかであって、労働組合期成会のそれと完全に一致していた。このような状態は、『労働世界』が第二七号（一八九九年一月一日）に「社会主義」欄を設けるまで、一年余り続いた。「社会主義」欄を設けた趣旨を、『労働世界』は「吾人は此の欄内に於て毎号欧米に於ける社会主義の大勢を記して以て実際に社会主義は二十世紀の人類社会を救ふの新福音なるを示さんとす」と述べた。『労働世界』一年前の第五号（一八九八年二月一日）において、初めて社会主義に言及し、「社会主義の立論は根拠頗る強固なる者にして、其の包含する所の真理や頗る味ふべき者」があるが、『労働世界』は「社会主義を主張する者に非ず、又無政府主義を唱ふる者に非ず、又虚無党主義を奉信する者に非ず、唯だヒューマニチーの光明を仮て我労働運動の前途を照らさんと欲するのみ」と論じたことを考えあわせるならば、その間における社会主義への傾斜の大きさが明らかになる。

『労働世界』への社会主義の導入は、もっぱら、編集部長片山のイニシャチブによるものであった。片山は、労働組合運動の面において、高野ほど理論的に高くはなかったが、元来ラッサールを理想とし、社会主義者を自称していただけあって、高野より幅広く社会の改革を考えていた。当時片山は社会主義研究会の有力なメンバーの一人であり、そこで安部磯

雄、村井知至らのキリスト教社会主義者から理論的啓発を受け、その思想を変化させつつあったのである。「社会主義」欄は、その後毎号、欧米の社会主義運動を報じ、社会主義の理論的問題をとりあげた。また第三三号（一八九九年四月一日）の「論壇」においては、村井が「余らは有り体に言ふべし、労働組合の帰着は社会主義なり」と論じたが、村井の主張は、必然的に労働組合運動と社会主義運動との結合の主張となった。

このような社会主義への傾斜は、労働組合運動に大きな波紋を投げかけ、労働組合主義者からの反対をひき起した。その現われが、『労働世界』第三四号（一八九九年四月一五日）に載せられた、労働組合期成会の「寄書・労働世界に警告す」であった。それには、次のように述べられていた。

「抑も期成会は元来政社にあらず、純然たる経済的団体なり、然るに友人労働世界は社会主義だとか、政事運動の必要だとかサモ労働者を煽動せんとするものの如く頻りに政事の現状を論評し又稍もすれば抗撃の鋒を資本家に向け却て薄弱なる労働者を悪むに至らんとす、吾人は労働世界が労働者の為めを思ふ熱情心より出たる言語なるを信ずるも期成会も亦労働世界の如く社会主義を以て宗教とし同盟罷工を以て労働運動の唯一の武器となす激烈なる団体と誤解さるるの不幸に陥るの憂あり」

これに対して『労働世界』は、第三六号（一八九九年五月一五日）において「吾人の地位」と題して、次のように反論を展開した。

「世の或る者は我紙面を批難して余り激烈なり、無骨なり、抗撃的なり、斯る句調を以て進まば遂に上流社会の同情を失ふべしと言う、……労働世界は此十有八ケ月間毎月二回は必ず労働の神聖を説き、又労働者団結の勢力なることを述べたり、……労働世界は、社会主義の人類主義なることを示し且つ之が解釈の労をいとはず、然り社会主義の人類主義にして、一般社会に稗益あるを示すと同時に、無政府主義、露国虚無主義の恐るべきを示し且つ此無人情の個人主義に正反対

を表したり、吾人は未だ曽て激烈なる挙動を表せず又激烈不法なる所為に賛同せず常に実際的に尽力し職工社会の自重を増すに努めたり、……吾人は真理を以て干戈となす、真理を云ふに当てや、吾事は毛頭も憚る所なし、我が批難者が吾人の真理と信ずる所の言を駁するか、吾人は決して一点一角も譲らざるなり」

このような労働組合期成会と『労働世界』との対立は、結局のところあくまで労働組合主義に徹する高野と、社会主義政党運動との結合に労働組合運動の新たな発展の途を見いだそうとする片山との対立であった。

高野と片山の対立は、活版工懇話会（活版工組合の前身。一八九八年八月結成）をめぐっても現われた。活版工懇話会は、元来労働組合期成会よりも、島田三郎や社会政策学会の桑田熊蔵、金井延らから強く影響を受け、運動方針をまったくの労資協調論においていた。この活版工懇話会の方針を、高野は積極的に支持していたのに反し、片山はきわめて批判的であった。活版工懇話会は、一八九九年七月九日、神田青年会館において演説会を開いた。この日桑田熊蔵（改良主義）、高野房太郎（日本の労働運動の方針）、片山潜（調和主義と社会主義）、金井延（社会主義を駁す）、島田三郎（工業家の責任）、神保院長・鈴木篤三郎（労働と赤痢）が演説を行なった。まず桑田熊蔵が「労働者と資本家とは経済上の組織から相調和せずんば非ざることは、経済上の原則と言って可なり」[12]と説き、続いて高野が労資協調論を説いたのに対し、片山は「資本と言ふものは必要である、労働と言ふものも必要である、仮令労働があっても資本が無ければいけないです、資本があっても労働者がなかったなればいけないです、併し私は此資本を監理して居る所の人間、此資本を左右して居る処の人間は、今日の如き有様ではいけないと思ふ、……私は一歩を進めて、資本と言ふものを労働者が持つことが出来たなれば持たせるが宜いではないか、と斯う言ふのです、……

此前座を為されたお方とは私は正反対の意見を持って居る、私は社会主義と言ふものは宜いと思ふです、鉄道は国家が所有して宜いと思ふ、水道の如きも既に東京市が所有して居ります如く、一個人よりかまだ社会全体が持った方が宜いと思

ふ[13]」と論じた。ところが続いてたった金井延は、「抑も職工組合の成功したるは何によるか、所謂政治上の関係を絶ち、経済上の目的に進むが故なり」と労働組合主義に賛意を表わした後、「今日の経済組織を根本的に改革するのと、其組織内にある事業につき或る経営につき、これと相似たる方針をとると大に異なる所なりとす。成程鉄道国有主義なぞを主張する米国の或る学者或はビスマルクも畢竟社会主義なりと言へる人あれ共、之は言葉の使い方にして夫は人の勝手に附したるのみ、一般に認むる処に非ず[14]」と、片山を鋭く批判した。この演説会では、もちろん片山自身も述べているように[15]、桑田、金井と片山との対立が主軸をなしているが、高野と片山との対立が、副次的な要素になっていることも見逃せない[16]。

このように高野と片山との対立をはらみながらも、労働組合運動は一八九九年末まではともかく順調に発展した。しかしながら一九〇〇年にはいると、労働組合期成会の運動は、急激に衰退に向かった。鉄工組合は、高野の提唱によって共済制度をしいていたが、それは「組合員の間で急速に人気を得[17]」、この共済制度のゆえに入会する者が多かった。ところが一八九九年夏、「炎暑の候に際し疾病亡者共平時に二三倍し為めに予定の経費を以て救済を行ひ難き景勢[18]」になり、ついには給付金を削減せざるをえなくなった。ところが共済制度が魅力で入会した組合員は、その魅力がうすれるにつれて組合費を払わなくなり、一九〇〇年四月頃には、組合費を払う者わずか一、〇〇〇人になってしまった。鉄工組合の衰退は、鉄工組合員が「会員の九分まで[19]」占めた労働組合期成会の衰退となった。さらに労働組合運動の衰退を決定的にしたのは、専制主義の権化・山県内閣が一九〇〇年三月に公布した治安警察法であった。治安警察法は、それまでの集会及び政社法による言論・集会・結社などの自由に対する規制を、一層精密周到に整備したにとどまらず、その第一七条によって労働者の団結を事実上禁止したのである。

このような状況に対して、当時社会主義協会に加わり、その社会主義思想を大きく発展させつつあった片山を中心に、労働組合期成会幹部の多くは、「今や治安警察法制定と共に既に開始した労働運動も其方針を一転して政事運動として決行せ

ざる可からざる気運に至れり」として「労働者独立政党を組織して平和の下に政事運動を為す事」、「政事運動の第一着として普通選挙を得るに極力先峰を向くる事」[20]を主張した。これに対し高野は『労働世界』第六〇号、六一号の「論壇」に「職工組合に就て」を発表し、治安警察法を制定して「此有益なる団体を滅さんとす」る支配階級に向かって「反省を求めて止ま」なかったのみならず、社会主義政党運動に局面打開の途を求める同志にも強く反省を求め、あくまで労働組合主義に徹することを主張した。しかしながら高野の抵抗は、支配階級に対してのみならず同志に対しても、無益であった。将来においてもまた、闘いが無益であると考えた高野は、個人的事情もあって、労働組合運動から完全に退き、再び新聞記者になり、一九〇〇年五月に勃発した北清事変を契機にして、九月には中国へ渡った。そして中国各地を転々流浪した高野は、一九〇四年三月一二日、肝臓膿腫のため、青島のドイツ人病院で、三六年の短い生涯の幕を閉じた。

(1) 片山の思想の形成過程については、隅谷三喜男『片山潜』一九六〇年（東京大学出版会刊）、Hyman Kublin Asian Reuolutionary, The Lite of Sen Katayama, 1964, 参照。
(2) 片山『自伝』二一八ページ。
(3) 片山「日本に於ける労働問題」『六合雑誌』第二〇〇号、一八九七年八月、三三ページ。
(4) (5) 片山「労働団結の必要」『六合雑誌』第一九九号、一八九七年七月、五、七ページ。
(6) 片山「資本家に告ぐ」『労働世界』第五号、一八九八年二月一日。
(7) 『労働世界』第一号、一八九七年一二月一日。
(8) 片山潜『日本の労働運動』一九五二年（岩波書店刊）、三七ページ。
(9) 同右三八ページ。
(10) 片山潜の消費組合理論とその運動については、拙稿「明治時代における労働者の消費組合運動とその理論」『生協研究』新版第二号、一九六六年、参照。
(11) 片山『日本の労働運動』五二ページ。
(12) 桑田熊蔵「労働と資本の関係」『労働世界』第四三号、一八九九年九月一日。
(13) 「片山潜氏の社会主義」『労働世界』第四六号、一八九九年一〇月一五日。
(14) 「金井延氏の社会主義」同右。

(15) 片山『日本の労働運動』一〇二ページ参照。
(16) 片山『自伝』二二六ページ参照。
(17) Takano Fusataro, Rodo Kumiai Kisei Kwai（ハイマン・カプリン編著『明治労働運動史の一齣』一九五九年、有斐閣刊所収）一一二ページ。
(18) 『労働世界』第四三号、一八九九年九月一日。
(19) 片山潜『日本の労働運動』七九ページ。
(20) 「労働運動の前途」『労働世界』第五七号、一九〇〇年三月一五日。

四、片山潜の思想と行動

——社会主義運動の指導者として——

一九〇〇年（明治三三年）一月、社会主義研究会は「社会主義の原理を討究し、之を我国に応用するを以て目的とす」（規約第三条）る社会主義協会へと発展し、事務所を芝区三田四国町の惟一館（ユニテリアン協会）から片山潜のキングスレー館へ移した。その会長には安部磯雄が就任したものの、彼は東京専門学校で講義をしなければならなかったから、実質上の活動の中心は、幹事の片山潜になった。片山は三月には、普通選挙期成同盟会に入会し、一一月にはその幹事となり、同会の選挙法改正起草委員となった。越えて一九〇一年になると、片山は安部をはじめとする社会主義協会の幹部たちと、社会主義政党の結成を準備し始めた。いよいよ、「労働者独立政党を組織」することを、実践する段階になったのである。この政党結成の試みには、日鉄矯正会が一九〇一年四月の大会で、「本会は社会主義を標榜となし諸労働問題を解釈すること、其の第一の方法として普通選挙同盟会へ加入すること」[1]を決議し、さらに「若し社会主義を基礎として政党が組織されるならば二千有余の組合員は悉くこれに参加すべし」[2]と片山に伝えてきたことが、大きな刺激になっていた。かくして五月二〇日、安部磯雄、片山潜、幸徳秋水、西川光次郎、木下尚江、河上清の六名によって、社会民主党が結成され、『社会民主党

宣言書』が発表された。

安部の筆になる『社会民主党宣言書』は、「如何にして貧富の懸隔を打破すべきかは実に二十世紀に於けるの大問題なりとす」と書出し、「若し直截に其抱負を言へば、我党は世界の大勢に鑑み、経済の趨勢を察し　純然たる社会主義と民主主義とに依り、貧富の懸隔を打破して全世界に平和主義の勝利を得せしめんことを欲するなり」とその立場を明らかにし、軍備全廃・階級制度全廃・土地と資本の公有など八項目の理想綱領と、八時間労働制・労働組合法の制定・普通選挙法の実施・一般人民投票制・貴族院の廃止・軍備縮少・治安警察法の廃止など二八項目の実践綱領を掲げた。そしてこれらの実現方法については、「吾人の説は頗る急激なりと雖も、而も其手段は飽くまでも平和的なり」[3]とした。

社会民主党は、その「宣言」にも明らかなように、徹底した合法主義的社会主義の立場をとっていたにもかかわらず、軍備全廃（縮少）・一般人民投票制・貴族院の廃止の三項目のために、治安警察法第八条第二項違反を理由に即日結社禁止となり、歴史上初の社会主義政党誕生の機会は去ってしまったのである。労働組合運動を圧殺した治安警察法は、このように社会主義政党運動をも不可能にしてしまったので、片山たちは再び社会主義協会にたてこもり、社会主義思想の啓蒙・宣伝活動に従事することになった。

社会主義運動は、以上述べたような過程をたどって展開されたのであるが、その間に片山は自己の思想を大きく転換させた。片山は、治安警察法の制定を契機にして、労働組合主義から、労働問題をも政治運動で解決しようとする立場へと、その思想を転換させていった。そして片山は　この転換を行なったのと時を同じくして、従来彼が懐いていた改良主義的な社会主義にも疑惑を持ち始め、社会主義思想の面でも変貌をとげていった。[4]すなわち片山は、「現時の生産機関を社会の共有となし土地鉱山原料道具機械又通信及交通機関を共有財産とするにあらずんば日々に増加進歩する所の社会的生産の結果が労働者の不幸と困難の原因とならずして労働者の安全と円満なる発達の補とならざるべし。機械的生産、通信通運の機関を

私有財産より公有財産とするは正しく革命なり。然り反抗の出来ざる勢ひ止むを得ざる革命なり。……社会主義者は社会改良政策が悉く無益なりと言はず。唯私有財産制度と生産的諸能力の衝突を医治すること即ち資本と労働の調和に向っての諸改良策は一も効果なきを断言する者のみ」[5]と述べて、かつて彼自身も採っていた改良主義を否定し　社会主義は革命によってのみ実現されると主張したのである。それでは、その革命はどのようにして行なわれるのであろうか。それは、「普通選挙は社会主義実行に向っては唯一の利器であって社会主義者が第一着に得んとする者は普通選挙である。一朝普通選挙を得れば社会主義者の欲する種々の社会改良は出来る」[6]という言葉が明瞭に示しているように、まず普通選挙権を獲得し、それによって労働者の代表を多数議会に送り込み、議会の決議によって革命を行なおうとするものであった。そういう意味では、「帝国議会は吾人が将来に於ける活劇場なり」[7]という社会民主党の立場は、片山の全面的に賛成するところであった。

改良と革命を概念上区別した片山は、しかしながら、ガス、水道などの市営、鉄道などの国営を依然として社会主義の実現形態と見て、積極的にその実行を提唱した。そして一九〇三年（明治三六年）四月には、『都市社会主義』を公にした。本書は、「如何にせば東京市を完全ならしむるか」（四ページ）との立場から、市政、土木、交通、道路、衛生、水道、ガス、電気、下水、教育などの都市問題を論じたものである。

『都市社会主義』を、在米時代からの残滓を多く持つ、片山の社会主義論の下限と見るならば、三カ月後に出版された『我社会主義』は、その上限とも見ることができる。片山はその「例言」の中で、「此れ著者が年来確執唱道する所の主義の発表即ち信仰個条の説明なり、其天下に向って与ふる宣言書なり、現社会―腐敗せる黄金万能力の而も資本家暴横の社会―に対する告訴状なり、資本家制度の維持者に送る手詰談判なり」と述べているように、本書は彼の社会主義理論の総決算書であった。片山は、第一章から第一六章にかけて、資本主義社会を、その成立・発展・崩壊の過程において分析し、ことに第一一・一二章においては、自由競争の終局点としてのトラストを論じ、第一三章以下においては、「資本家の最後」と

題して、資本主義制度の矛盾に起因する労働者階級の反抗の激化について述べ、社会主義社会到来の必然性を論証している。第一八章から第二七章にかけては、社会主義運動とまさに来たらんとする社会主義社会の政治・経済・文化などを明らかにしている。第二八・二九章では、資本主義社会から社会主義社会への移行の問題を取り扱い、「社会主義の理想は人類の理想なり」（一六一ページ）と論ずる第三〇章で結んでいる。本書は、剰余価値を剰余価格とするなどの誤りや、革命を進化論的に把握する弱点を含みながらも、時を同じくして発刊された幸徳秋水の『社会主義神髄』と共に、明治社会主義が樹立した金字塔の一つである。

『我社会主義』を公にした一九〇三年の暮、休む暇もない活動による憔悴と、生活の貧窮と、妻フデの死去などによる家庭の不幸とに悩んだ片山は、生活の立て直しをはかり、さらにはアムステルダムで開かれる第二インターナショナル第六回大会に出席すべく、アメリカ合衆国に向けて横浜をたった。彼は第二インターナショナルが第五回大会（一九〇〇年）において、各国代表二名でビューローを構成することを決議したとき、安部磯雄と共にその本部員に選ばれていたのである。

この頃社会主義運動のリーダー・シップは、すでに片山の手から幸徳の手に移っていた。日露の開戦を目前にして、万朝報を退社した幸徳秋水と堺利彦は、一九〇三年一一月一五日、平民社を設立して、週刊『平民新聞』を発行し、果敢に非戦論を展開していた。日本の社会主義者は、迫りくる日露戦争を前にして、今や「非戦」を焦眉の課題とせざるを得ず、ここに非戦論の闘士幸徳秋水と堺利彦が、脚光を浴びて舞台に登場してきた。そして平民社の設立に伴って、社会主義協会の事務所は、片山のもとから平民社に移されたのである。

アメリカ合衆国に渡った片山は、一九〇四年（明治三七年）五月、シカゴで開かれたアメリカ社会党大会に出席の後、八月にはオランダ・アムステルダムで開かれた第二インターナショナル第六回大会に出席した。片山は交戦下のロシア代表プレハーノフと共に副議長に選ばれて、反戦演説を行ない、壇上で歴史的な握手をかわした。これによって片山の名は、欧米の

社会主義者の間で一躍有名になった。大会ではさらに、フランス代表から提出された「日露戦争反対決議案」が万場一致で可決された。

その後片山は、アメリカ合衆国に帰り、一九〇六年（明治三九年）一月に一旦日本に帰国するまで、約一年四カ月滞在したのであるが、その間彼はテキサスのヒューストン近郊に数百エーカーの農場を買い米作事業を営んだ。一九〇六年一月の帰国も、資金の調達と移民招致のためであった。しかしながら片山の農場経営は、結局失敗に終わり、彼は一九〇七年二月一九日、帰国したのである。

片山が農場経営に余念のなかった二年数カ月の間に、日本の社会主義運動は大きく変っていた。政府の弾圧の前に、財政困難と思想的分裂とに悩んだ平民社は解散を余儀なくされたが、一九〇六年一月に成立した自由主義的な西園寺内閣のもとで、日本社会党が結成された。しかしながら、社会民主党の圧殺以来五年目にして初めて社会主義政党が生まれ、社会主義運動は順調に発展するかに見えたが、予期せぬ問題が発生して、大きく激動するにいたった。それは幸徳によるアナルコ・サンジカリズム的直接行動論の鼓吹であった。幸徳は、『週刊・平民新聞』の印刷人であったため五カ月の禁錮に処せられて入獄した巣鴨で、それまで信奉していた議会主義に疑いを懐くようになり、さらに一九〇五年一一月から翌年六月にかけての渡米中に、ロシアから亡命してきたアナーキストたちと接触を深めるなどして、直接行動論へと転換していったのであった。幸徳は帰国後、精力的に直接行動論を展開し、社会主義者は「それこそ寝耳に水とも称すべき全然予期せぬ一大波浪に見舞はれた形であった」[8]が、幸徳の思想を受け容れるにふさわしい政治情勢の存在と、彼の運動における卓越した地位から、その影響を急速に拡めていった。もちろん直接行動論に対して一方には、それまでの議会主義に徹する潮流も田添鉄二を中心に依然として存在しており、直接行動派と議会政策派は、一九〇七年二月一七日に開かれた日本社会党第二回大会の席上、大会決議をめぐって激突したのである。評議員会提出の決議案に対して、議会主義を主張する田添修正案と、直接行

動を主張する幸徳修正案とが提出され、大激論の後、評議員会案が二八票を獲得して可決された。西川光次郎が獄中にあり、まだ帰国していなかったとは言え田添案がわずか二票しか獲得できなかったのに反し、幸徳案が評議会とほぼ等しい二二票を獲得したことは、幸徳の影響がいかに大きかったかを雄弁に物語った。しかも評議員会案自体が、幸徳の影響を強く受けた折衷的なものであったので、「大会は事実に於て大多数を以て幸徳説を可決した者と謂わざるを得」[9]なかったのである。

片山は、この日本社会党大会の二日後に、帰ってきたのである。日本社会党大会に現われた新しい動向は、政府の警戒するところとなり、大会決議と幸徳の演説を掲載した二月一九日付『日刊・平民新聞』は、安寧秩序を乱すものであるとして発売禁止になり、編集発行人の石川三四郎は起訴された。ついで二月二二日には、日本社会党までも西園寺内閣によって結社を禁止された。

日本社会党の結社禁止後わずか二カ月で、『日刊・平民新聞』もまた発行停止になったが、これによって幸徳秋水、堺利彦、森近運平、山川均、荒畑寒村ら直接行動派と、片山潜、田添鉄二、西川光次郎ら議会政策派との分裂は決定的なものとなった。すなわち『日刊・平民新聞』の後継紙を目指して、一九〇七年六月一日には、森近運平編集の半月刊『大阪平民新聞』が創刊され、翌二日には、片山、西川らによって週刊『社会新聞』が創刊され、これらはしだいに両派の機関紙の観を呈するにいたり、お互に紙面で相手を露骨に攻撃しはじめたのである。

このような分派闘争は、ついに組織的対立にまで発展して、分裂は固定化し、もはや統一の回復は不可能となった。議会政策派が八月二〇日に社会主義同志会を結成して、毎週社会主義研究会を開けば、これに対抗して直接行動派は九月六日に金曜会を結成して、毎週金曜講演会を開いた。

以上のような分派闘争の過程で、直接行動派はますます左翼化し、足尾銅山（一九〇七年二月四～七日）と、それに続く別子銅山（六月四～七日）の大暴動を直接行動論の正しさの証明として受けとるようになった。そして金曜会は屋上演説事件

（一九〇八年一月）、赤旗事件（六月）による弾圧の中で壊滅していった。赤旗事件は「弾圧の主体を右旋回せしめると同時に、弾圧の対象たる『左派』、『直接行動』派をいよいよ左旋回せざるを得ない立場に追い込ん」[10]だ。大逆事件（一九一〇年五月）による直接行動派の最後的壊滅は、この左旋回過程の論理的帰結でさえあった。

このように直接行動派が壊滅の一途をたどったことによって、片山たち議会政策派が勢力を挽回したかというと、そうではなかった。一九〇八年になると、昂揚する直接行動論の波は議会政策派の最高幹部の一人西川光次郎までも巻き込んだ。西川光次郎らは二月一六日突如として片山潜を社会主義同志会から除名し、三月一五日、旬刊『東京社会新聞』を創刊した。この分裂は、あまりに議会主義的な片山潜と西川光次郎、赤羽一らとの理論的対立に、片山の性格から生じた感情的対立がからんで起ったものである。

三月二〇日には、最後まで片山潜と行動を共にした議会政策派の理論的指導者・田添鉄二が肺を患い、三四歳の若さで赤貧のうちにこの世を去った。しかも西園寺内閣の後をうけた桂内閣の反動ぶりは言語に絶し、一九〇六年の電車賃値上げ反対運動に関する兇徒聚集事件の被告たちは直ちに保釈を取り消され、赤旗事件の裁判と前後して大審院判決が下り、西川光次郎は重禁錮二年に、山口孤剣、大杉栄、吉川守圀、岡千代彦、樋口伝らは各一年半に処せられた。これによって西川派、片山派をとわず打撃を受け、社会主義同志会は全滅し、『東京社会新聞』は九月一五日僅か一五号で廃刊のやむなきにいたった。

しかしながらこのような逆境にあっても、片山潜は、労働奨励会（一九〇七年）、鉱夫組合（一九〇八年）、労働倶楽部（一九一〇年）などをつくり、必死に労働者の組織化に努める一方一九〇七年以来再燃してきた工場法問題に取り組み、その制定を要求すると同時に、普選運動をねばり強く展開した。そして片山は大逆事件後の厳しい反動の嵐の中で、一九一一年の大晦日から翌年正月二日までの東京市電ストライキを応援したが、[11]その彼もストライキ煽動を理由に起訴され、治安警察法

第一七条違反で五カ月の重禁錮に処せられた。

一九一二年九月二七日、片山は明治天皇死去による大赦によって、満期の九日前に出獄した。しかし監獄の外は、監獄の中と同様、自由ではなかった。すべての社会主義運動が窒息させられていた「冬の時代」のこととて、片山は三人の警官によって昼夜を分かたず監視され、再び活動を始める余地はなかった。生活もまた極度に苦しかった。思いあぐねた片山は、生活と運動の立て直しを図ろうとして、一九一四年（大正三年）九月、四度目の渡米の途についた。その旅は亡命同様であった。彼は出発の直前に、その感懐を、「今日の渡米は日本で逆境に堪え得ないからである。固より外国の同志に訴へて日本に於ける主義の運動を盛んにせんとするのは予の唯一の目的ではあるが去りとて病身の妻と三人の子供（十六歳を頭とする）[12]を後に残して行くのと寄附や餞別で百五六十円も貰ったが妻子の手当や自分の旅費の為めに自分所有の家屋を抵当に入れて、金を借りて行く始末、先きには二十五歳の血気旺盛の青年、今や五十四歳の半老人！渡米は余り希望を以ているのではない」[13]と記した。そして片山は、再び日本へ帰ってくることはなかったのである。

（1）「日鉄矯正会の意気込み」『労働世界』第七七号、一九〇一年五月一日。
（2）安部磯雄「明治三十四年の社会民主党」『社会科学』第四巻第一号、一九二八年二月、七四ページ。
（3）「社会民主党宣言」（岸本英太郎編・解説『明治社会運動思想』上巻一九五五年、青木書店刊所収）、一五五～六五ページ。
（4）従来この時期の片山の思想の変化を、労働組合主義から社会主義への転化として特徴づける岸本英太郎などの見解が有力であるけれども、労働組合主義者であり同時に穏和な改良主義的社会主義者であった片山が、労働組合主義を否定するのと前後して、改良主義的な社会主義をも克服し、革命を肯定する立場へ転化したと考えるべきであろう。しかし革命を肯定したからと言っても、それを実現する手段は、本稿で明らかにしたように、あくまでも穏和であって、片山の社会主義は一貫して穏和な社会主義のカテゴーリに属するものであった。
（5）片山「社会改良と革命」『労働世界』第六〇号、一九〇〇年五月一日。
（6）片山「社会改良手段普通選挙」（『片山潜著作集』第二巻、一九六〇年、片山潜生誕百年記念会刊所収）、一三三ページ。
（7）「社会民主党宣言」（岸本『明治社会運動思想』上巻所収）一六六ページ。
（8）吉川守圀『荆逆星霜史』一九五七年（青木書店刊）、一〇七ページ。
（9）堺利彦「社会党大会の決議」『日刊・平民新聞』第二八号、一九〇七年二月一九日。

(10) 大河内一男『黎明期の日本労働運動』一九五ページ。
(11) 平野義太郎は「日露戦争後、足尾銅山の大争議を組織し、ついで運動の戦略戦術にかんして幸徳らと対立したが幸徳らの死刑後『暗黒の冬の時代』にもかかわらず、東京市電の越年闘争には、東京ではじめて電車を全線にわたり止めてしまった」（傍点辻野。片山潜『自伝』三七二ページ）と、あたかも片山が東京市電のストライキを指導したかのごとく述べているが、これは誤りである。この争議において片山が果した役割は、支持と援助を越えるものではなかった。また彼が「足尾銅山の大争議を組織し」たなどとは、まったく事実に反する。その頃まだ日本へ帰っていなかった片山が、どうして「争議を組織」することができたのであろうか。
(12) 片山は、一九〇七年五月に、原たまと再婚していた。
(13) 片山『自伝』一二八ページ。

五、評　価

明治期の片山潜は、トータルに、漸進主義者として規定することができるであろう。そしてこの点にこそ、彼の第一のメリットが存在するのである。片山はまず労働組合運動の面において、高野と協力して黎明期の運動を大きく発展させた。片山がそれによって運動を指導した思想が、労働組合主義であったことは、若干の問題を含みながらも、否定的に評価されるべきではなく、逆に肯定的に評価されねばならない。ここで詳しく論じる余裕はないが、労働組合主義の定着こそ、日本の労働組合運動の必須の課題であったのであって、片山と高野は、その先駆者であった。したがって、片山の行動に問題点があるとするならば、それは労働組合主義を懐いたことではなく、一九〇〇年の時点で、労働組合運動行き詰まりの脱出口を、社会主義政党運動に求めたことである。労働組合運動と社会主義政党運動との結合を正しく主張していた片山も、治安警察法制定を契機に、「労働運動も其方針を一転して政事運動として決行せざる可ら」ずと論じて、労働組合運動を、次元の違う社会主義政党運動に解消してしまった。そして彼は、安部たちと社会民主党を結成したのであった。しかしこの社会民主党が、労働組合運動を壊滅させたあの治安警察法の第八条第二項違反を口実に、即日禁止になったのは、片山にとって皮肉な出来事であった。この時点で片山がとるべき態度は、社会主義政党運動へ転進することでなく、一歩退却した地点で

労働者の組織を維持しつつ、治安警察法撤廃のために闘うことであった。もしこのような路線を片山が歩んでいたならば、日本の労働組合運動が大正にはいって、労働組合期成会より数歩後退した友愛会という形でしか再出発できなかったという事態は、防げたであろう。さらに組織的な労働組合運動がどんな形であろうと存続していたならば、明治の社会主義運動も、いくぶんかは観念左翼性を脱皮し、足が地についた運動になっていたかも分らない。社会主義政党運動へと転進した片山も、その後は再び正しい立場にもどり、労働奨励会、鉱夫組合、労働倶楽部などを結成して労働者の組織化に努めたが、時すでに遅く、成果を実らせるにはいたらなかった。

社会主義運動の指導者としての片山は、どうであったろうか。片山の社会主義運動には、天皇制や帝国議会に対する甘い幻想が存在していたが、彼の議会主義的社会主義は基本的にブルジョア・デモクラシーの発展法則に立脚した、正しいものであった。しかしながら、松田道雄のように、片山を明治社会主義運動の「失格者」と評価し、「労働者階級の『覚醒』がきわめて遅いとき、社会主義者の運動は漸進主義をつづけることはできない。小なる善をつみ重ねるよりは、現存する悪をトータルに否定する道を選ばないわけにはいかない」[1]として、幸徳を高く評価する意見もある。それでは、幸徳には、「現存する悪をトータルに否定する」戦術や組織論があったであろうか。否である。彼はただ、団結禁止法たる治安警察法のもとに無組織状態で呻吟している労働者に向かって、ゼネラル・ストライキを絶叫しただけであった。彼は、過激な直接行動論を唱えることによって、観念の中で「現存する悪をトータルに否定」したかも分らないが、労働者をとりまく現実はほんの少しも改善されなかった。かえってそれは、政府を警戒させ、大逆事件をまねきよせる遠因にさえなったのである。

片山は「小なる善をつみ重ねる」側のリーダーであったが、「労働者階級の『覚醒』がきわめて遅いとき」ほど、「小なる善をつみ重ね」、運動の大衆的基盤を生み出していくことが、重要であった。そういう意味で、片山は決して明治社会主義運動の「失格者」ではなく、最もすぐれた指導者の一人であった。

片山のメリットの第二は、活動のあらゆる面で、労働者に密着していこうとした彼の組織論とその活動にある。片山のライヴァルであった幸徳は、議会主義的社会主義者であった時期においては、労働者階級を解放の客体としては把握しても、主体としては把握せず、「志士・仁人」に革命への決起を訴えるだけであった。直接行動論へ転換してからも、幸徳は「今日の革命は労働者の革命である」[2]とは唱えたものの、実際には、労働者を組織するためにはなんらの努力もせず、結果的には「プチ・ブル・インテリゲンチャに向って直接行動論を説いた」[3]のである。

それに反して、片山は労働者階級が解放の主体であることを、真に理解していた。松田道雄も言うように、「明治の社会主義の方法の決定的な欠陥は、それが人民大衆から孤立していたことである」[4]が、労働者階級の歴史的役割を認識していた片山にしてはじめて、この「人民大衆からの孤立」の危険性を認識することができたのである。片山こそ、「人民大衆」との結合の道を模索して、寝食を忘れて活動した唯一人の指導者であった。結果的に彼の活動が成果を実らせなかったからと言って、彼の評価が下がることはない。明治の社会主義者のうち、誰一人として、彼以上に現実的成果をあげえた者はいなかったのであるから。

片山は党派的目的のために、歴史を偽造してまで賞揚されたり、逆に「失格者」という烙印を押されて不当に低く評価されてきたが、いまや彼の真実の姿に照らして、正当に評価されるべき時期がきているのではなかろうか。

付記　本稿は京都大学人文科学研究所社会運動班の研究会で行なった報告をもとにしており、そこでの批判から貴重な示唆を得ました。

(1) 松田道雄「日本の知識人」（『日本知識人の思想』所収）、四三ページ。
(2) 「幸徳秋水氏の演説」『日刊・平民新聞』第二八号、一九〇七年二月一九日。
(3) 岸本英太郎『日本労働運動史』一九五〇年（弘文堂刊）、九四ページ。
(4) 松田・前掲書五〇ページ。